
TIGER & BARNABY

久保田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TIGER & BARNABY

【Nコード】

N5406V

【作者名】

久保田

【あらすじ】

大都市・シユテルンビルトは、その能力を駆使して、街の平和を守るNEXT「スーパーヒーロー」が存在する。

彼らの活躍ぶりは専用の特別番組「HERO TV」で中継され、平和を守る傍ら、その年の「キングオブヒーロー」の座を巡るランキング争いを続けていた。

そんなTIGER & amp; BUNNYでのifストーリー。
小さく改変していきます。

A r c a d i a 様に投稿も投稿しています。

一話『終わりも始めも良くはない』 前編（前書き）

注・作中ではスポンサーが架空の会社になっています。
あと一話後編まではアニメと大して変わっておりません……。

「話『終わりも始めも良くはない』 前編

積層都市シュテルンビルトは三層に分かれている。

最上層のゴールドステージ。

中層のシルバーステージ。

最下層のブロンズステージ。

多重立体型都市であるこの街は、計画的に建設され、世界でも類を見ない設計。

その繁栄は、街並みを見るだけでもよくわかるだろう。

高層ビルが立ち並び、消える事の無い光が灯り、夜の闇をあつて無き物にする。

しかし、人類の技術の粋を集めたシュテルンビルトでも、人の欲望は全て受け止められない。

今夜もまた、自らの欲望を安易に叶えようと、愚かな犯罪に手を染める者達が現れる。

しかし、

「あ、兄い……！ もう逃げきれねえよ……」

「馬鹿やろう、まだ諦めんな！」

「あ、やべえ！」

闇ある所、光あり。

犯罪者達の魔の手から、シュテルンビルトの善良な市民を守るHERO達がいた！

『さあ、今宵も始まりましたHERO TV！ 今日の犯罪者は銀行強盗未遂で逃亡中の三人組だぁ！』

ヘリのサーチライトが、シルバーステージのハイウェイの上を、必死に運転する黒ずくめの男達を照らし出す。

RPGや、マシンガンを装備している。

車はそこから盗んだ黄色のスポーツカー。

運転手とは違い、フルスロットルで走れるのが嬉しいのか、ご機嫌なサウンドを響かせて爆走中。

すでにハイウェイの封鎖は終わり、邪魔な車は一台も走っていない。

ヘリに乗ったカメラマンからの映像は、すでに生放送でシュテルンビルト全域に放送されている。

ある者はビルに設置されている巨大スクリーンで、ある者は我が家で、ある者はバーで。

老若男女、人種、国籍を問わず、手に汗握り、テレビに釘付けだ。警察とのカーチェイスがお望みか？

そんなものはNO。

そんなありふれたイベントは、もううんざりだ。

それより、もっとスリリングでエキサイティングな物を、シュテルンビルトの市民達は知っている。

爆走するスポーツカーの行く手を阻むは、一人の人影。

ノンストップで突っ走るスポーツカーは、すでに300kmオーバー。

その前に立つなど、正気の沙汰ではないだろう。

「兄い!？」

「くそつ、構うこたねえ! ぶちかませ!」

スポーツカーのアクセルを、床に叩き付ける勢いで踏み込んだ。彼らの正面に立つ人影。

いや、人影というのは相応しくない。

人の肩にドリルは付いていない。

人の頭に角は生えていない。

緑の装甲に覆われたボディは、どこもかしこも、ひたすらこつ。軟弱さの欠片も感じられないその姿。

加速するスポーツカーに対して、彼は少し腰を落として両手を広げてみせた。

いくら装甲があるからと言って、正気を疑うような行為だ。

多少の装甲があろうと、一個の弾丸となったスポーツカーを止められる人間はいない。

そう、

ただの人間ならば、だ。

『おおっと、最初に現れたのは、「西海岸の猛牛戦車」！ ロックバイソンだああああ！ 激しくクラアアッシュ！ 真っ正面から車を受け止めた彼は、果たして無事なのでしょうか！？』

白い煙が濛々と立ち込める中、彼はいた。

300kmオーバーの衝撃に小揺るぎもせず、その太い両の腕で、スポーツカーのバンパーをしっかりと掴み、空に掲げている姿は、まるで獲物を掲げる戦士のようだ。

NEXTと呼ばれる特殊能力者が現れてから、四十五年。

NEXTを生かし、特殊スーツを纏ったHERO達は日夜、悪と戦い続けるのだ！

カメラがスポーツカーを掲げるロックバイソンに、ズームする。

お茶の間に映し出されるのは、ロックバイソンの肩。
そこには「牛の久保田」と書かれていた。

『ロックバイソンが止めたああ！+50pt獲得うう！ おつと？
しかし、犯罪者が逃げてしまっぞ？』

ほぼ垂直になった車から、犯罪者達が転げ落ちるようになして逃げ出した。

「お、おい！ 待て！」

しかし、ロックバイソンの鋭い角が仇になっただけで、車に刺さった角が抜けずにおたおたとしているのが、お茶の間に流れる。

「よっしゃ、今だ！」

「逃がさないよ！」

勇ましい叫びと共に、どこからともなくしゅたつと華麗に参上したのは、

『来たあああ！ 「稲妻カンフーマスター」ドラゴンキッドだあああああ！』

龍の刺繍のされ、改造されたカンフー風の服。
手にした長い真つ赤な棒が、ぶおんぶおんと、聞く者の身を竦ませる風切り音を立てながら回す、回す、回す。

そして、棒を腰の後ろに回して、びしりとポーズ。
びしりと決めたポーズは、頭に着けられた大きな丸い円形のパーツに書かれたスポンサーロゴの文字を、カメラへとはっきり映し出

していた。

彼らはNEXT能力を生かして戦うスーパーヒーローだ。それと同時に、会社に雇われ、スポンサーの広告を背負って働くサラリーマンでもあるのだ。

ヒーロー達の活躍次第では、スポンサー企業の業績が鰻登り。しかし、HEROランキングと呼ばれるランキングが下位になってしまうと、広告の効果が無くなり、業績が右肩下がり。

あまりにも活躍しないようであれば、HEROはリストラされる可能性すらある。

HEROとて世知辛い世の中だ。

しかし、そんな宮仕えの悲哀など悪漢達には関係ない。

「撃て、撃て！ HEROだからって、銃で撃たれて無事なはずがあるもんか！」

兄貴分が叫ぶと、弾かれたように二人が動き出す。

手に持ったマシンガンを、まだ幼さを残したドラゴンキッドに向けた。

「ちくしょう、こんな事になるなら最初からやらなきゃよかった！」

悲痛な叫びは彼の本心だろうが、同時に捕まりたくないというのも本心だ。

拮抗する本心は、一瞬で天秤が傾き、彼に引き金を引かせる。

数々の悪党どもを捕まえて来たHEROは、ここで鉛玉にやられてしまうのか！？

「ほあちゃああああ！」

そんなはずはない。

右へ、左へと目にも止まらぬ速さで動くドラゴンキッドを、悪党の銃弾程度で捉えられるはずがないのだ！

稲妻カンフーマスターの名に相応しく、彼のNEXTは「雷を操る能力」だ。

テレビ栄えるように、一瞬だけ「雷」の文字を電光で描くと、瘦身にその光を纏う。

まさに電光石火という言葉が相応しい動きで、悪党の一人と距離を詰めると、

「ほわっ！」

地を這う虎が、空を舞う龍に飛びかかるが如き、天を突く蹴りが彼の腹に突き刺さる。

どすん、と腹の底に響く音。

そして、蹴りで宙に浮いた男より上へと、一瞬で跳躍。手にした棒はすでに振りかぶられている。

「あちよおおお！」

天空を支配する龍が、小癩な虎を襲うが如き一撃が悪党に叩きつけられる。

その一撃は彼を地面でバウンドさせた。

動かなくなったのを確認した、ドラゴンキッドは棒を振り回し、再びびしりとポーズを決めた。

『ドラゴンキッド、華麗なカンフーで犯人を一人、逮捕おおお！』

いつの間にか追い付いて来たHERO TVの地上班の前で、スポンサーのロゴが見えるように。

勿論、そんな事をしていれば、隙だらけになってしまう。

『おーっと！ ドラゴンキッドの隙を突いて、残り二人が逃げ出した！』

理性的に考えて、HEROに勝てるとは、短絡的な悪党でも考えていなかった。

我欲の強い悪党達は、
味方一人を囷にして、まんまと逃げ出したのだ。

『そして、ここで「見切れ職人」折紙サイクロンだ！ 芸術的な見切れが、今日も美しい！』

スポンサーのロゴが映し出されるよう、カメラのフレームに半身のみ入るHERO。

その名は折紙サイクロン！

犯人逮捕より、見切れに命を賭ける姿はヒーローランキング下位でだろうと、妙な熱狂的ファンを与えている。

何せ折紙サイクロンを雇うヘリペリデスファイナンス社の社長が、彼のファンになっているくらいだ。

カメラが東洋のNINJAによく似たスーツを纏った折紙サイクロンから外れると、格好いい（と自分で思っている）NINJAっぽいポーズを解く。

「よっしゃー！ 見切れたでござるー！」

と、全身で嬉しさを表すように、叫んだ。

一応、説明すると彼のNEXTは「他人そっくりに擬態する能力」である。

普段、使う事はほとんどない上、見切れたとしてもポイントにはならないが。

必死に走る悪党達は、まんまと逃げ切ってしまうのか？

まさかそんなはずはない。

ド派手に改造されたスポーツカーは、悪党達が乗っていたスポーツカーとは比べ物にならない。

走る彼らを後ろから、猛スピードでぶち抜くとフルブレーキング。アスファルトに火花を散らしながら、360°のフルスピンから再び180°ターンをすると完全に停止し、犯人に向き合う。

特殊なホイールを装備し、どんなスピンをしながらでも走れるイカした車から、優雅に降り立つHERO。

その名を、

『今日も魅せてくれるか、「ブルジョア直火焼き」！ 来たぞ、フアイヤーエンブレムだ！』

鍛え抜かれたそのボディラインを悪党に見せ付けるように、サイドチェスト。

見事な筋肉が薄い、赤を基調としたスーツに浮き上がる。

覆面レスラーのようなマスクは、まるで昔ながらの正統派ヒーローだ。

しかし、地に降り立ったフアイヤーエンブレムは、力強いポージングを終えると、右手を腰に当て、見事なモンローウォークで悪党に接近していく。

自慢のヒップが背中のマントの下から、ちらりちらりと見え隠れ。力強い男、セクシーな女を兼ね備えた彼／彼女。

「よりによって、こいつかよ!？」

「いやだ! 捕まるなら違うHEROがいい!」

ファイヤーエンブレムは右手を悪党に向けると、空中に炎で「FIRE」の文字が描かれる。

「あらん、私の熱いベーズは癖になるわよん?」

セクシーボイスと魅力的なウインク。

そして、彼らに送られるのは、熱い熱い炎。

その炎を愛を籠めて、こねるこねるこねる。

一回転ごとに巨大になっていく、彼の炎は悪党達の心胆を冷やした。

「炎を操る能力」のNEXTだ。

「うわあああああああ!？」

「あらん?」

彼らがもし、その場に少しでも踏みとどまっていたのなら今頃、美味しそうなローストになっていただろう。

しかし、最初から逃げ出そうとしていた悪党達は、一瞬も留まる気はなく、真っ直ぐ背中を見せて逃亡していた。

「んーもっつ!」

彼らの背中、というより尻を見ながら、ファイヤーエンブレムはしなを作った。

麗しいレディーを誘うような、魅力的な尻では無い。

その時点でファイヤーエンブレムは、追いかける気を失った。

暗黙の了解で一度、獲物を逃したHEROは、次のHEROに出席を譲る事になっている。

とは言え、やる気が無くなったという理由で帰れるのも、彼自身がヒーロー業務を委託されている七大企業『ヘリオスエナジー』の社長だからだ。

株主が少しくらい五月蠅いかもしれないが、それくらい黙らせるだけの実績はある。

享楽を心から愛しているが、それに溺れないだけのクールなダンディ。同時に溢れるセクシー&ナイスヒップ。

それがファイヤーエンブレムである。

『今、入った情報によりますと、強盗犯達はモノレールをハイジャックした模様です！ 何という事でしょうか！』

もしも、これが警察組織だったら責任問題に発展しているだろう。しかし、この場の責任者はTVのプロデューサーだ。

無責任、無遠慮、視聴率が取れば何でもいいという、血も涙も無い同業のプロデューサーにすら蛇蝎の如く恐れられる女傑アニエス・ジュベールだ。

強盗犯がモノレールを乗っ取った、という良心が欠片でもあれば、恐れおののくであろう事態に、彼女が発した第一声はこれだ。

「使えるわね」

部下であるケインは正直、本気で引いた。

見た目だけは美人キャリアーマンなアニエスだが、きっとこのタイトスカートを脱がせば、小悪魔の尻尾などという可愛い物ではなく、サタンが尻から頭を出している事だろう。

事件が会議室で起きていようが、現場で起きていようが視聴率になればそれでいい。

移動式の中継車からアニエスは、ケインからインカムを受け取ると、通信を始めた。

「タイガー、聞こえる？ 今からCM入れるから、三十秒後にゴーよ」

アニエスの声は蠱惑的な官能を含みながらも、言っている事は口クでもない。

一分一秒を争うような事態だというのに、CMを入れて、スポンサー収益を上げると言っているのだ。

『はあ？ 何言ってるんだ、CM？』

モノレールの上で、仁王立ちをする男が、怪訝な顔をする。

『おおつと……この大事な場面で「正義の壊し屋」ワイルドタイガーだ！ 大丈夫なのか、一体いいいい！？』

青いスーツに身を包んだ彼こそ、株式会社「TopMag」のHEROワイルドタイガーだ！

しかし、その異名の通り、正義のためなら物を壊す事を躊躇しない。

かかった賠償金は、十年以上にも渡るヒーロー生活でいくらにな

っているか想像もつかない。

それでも、まともな感性をしているタイガーは、アニエスに比べれば余程、好感が持てるとケインは思った。

「そうよ。 その方が盛り上がるでしょ？」

『こんな時にCM待ちなんかしてられつかよ！』

「ちょっと！」

ワイルドタイガーの目に映るのは、悪党に銃を突きつけられ、脅える運転手の顔。

それは彼の燃える心が許してはおけない！

「ああ、もう！」

アニエスの内心も、タイガーへの聞くに堪えない罵声で一杯だ！だが、そんなアニエスの罵声を実際に聞いた所でタイガーは止まりはしない。

ヒーロースーツが、はちきれんばかりに膨れ上がって行く。これが彼のNEXT「ファイブミニッツハンドレッドパワー」だ。五分間のみ通常の百倍の身体能力を発揮するのだ。

「言う事、聞きなさい！」

『俺達、ヒーローは平和を守れりやそれでいいんだよ！』

こういう時は絵になる台詞を言うのに、とケインは思った。だが、何故かカメラが回っている所だと、ロクな事を言わない。かなりのベテランのはずだが、世渡り下手だ。

しかも、

『ワイルドに吠えるぜ!』

モノレールのレールを掴むと、そのまま力任せに引きちぎると、
飴細工でもしているかのように、レールを軽々と固結び。

もう、悪党も犯人も関係なく、涙目になりながら止まってくれと
運転席では、モノレールのブレーキと神に祈っているだろう。

そのうち、タイガーが通算でいくら破壊したのかを検証する企画
でも出そう、と思いながら、ケインは機材の操作の手を休めなかつ
た。

「また……あいつ……!」

アニエスの憎々しげな言葉を部下として、礼儀正しく無視するく
らいの世渡りはケインにはあった。

ついでにタイガーなら、こんな時に余計な事を言うんだろっとな、
という想像がはつきりと脳内に浮かんで来たが、僅かばかりの笑いと
共に消し去った。

一話『終わりも始めも良くはない』 後編

正義の壊し屋と呼ばれるワイルドタイガーだが、それが原因で他者を傷付けた事は殆どない。

人命救助にビルの外壁を破壊したとしても、破片の落下点に人がいないかどうかを、ハンドレッドパワーによって強化された超聴覚により、確認しながらやっている。

荒々しいように見えて、人命最優先の行いはまさにヒーローだ。今回もモノレールのレールを破壊したが、そのレールを曲げて車止めの役割をきちんとさせている。

しかし、

「やれやれ、まーたタイガーか。俺はこう見えても、タイガーに巻き込まれる事、四十五回のプロだからな。だから、ぶへら!？」

急ブレーキによる慣性を考えてあつたりはしない。

乗客達が慌てふためき、床に伏せる中、一人だけ座席で喋っていた男が急ブレーキで舌を噛んだ。

まあきちんと黙って伏せていれば、このような事にはならなかったが。

「いよつしやああああ!」

車内の様子など知る由もないワイルドタイガーは、モノレールがしっかりと止まったのを確認すると、助走も無く飛び出した。

オリンピック選手でも、五メートルはあるであろう距離を助走無しでは難しいだろう。

しかし、ワイルドタイガーのハンドレッドパワーは、そんなちっぽけな距離を問題にせず、モノレールに飛び移る。

鉄拳一閃。

「ひひひひひひ！？」

運転席のガラスを叩き割り、中に侵入。

怯える運転手がうずくまり、頭を抱えているのを一瞬で確認。

これなら銃撃戦になっても大丈夫、という所まで思考よりも早く判断。

そして、ここでタイガー決め台詞。

「悪党共、お縄につけ……って、あれ？」

運転席には、怯えた運転手がいるだけで、悪党達の姿はどこにも見えない。

客車の方に逃げたか？ そうなったら、厄介な事になるな……。

ワイルドタイガーは市民を見捨てない。

いや、HEROは市民を見捨てない。

つまり、ワイルドタイガー＝鈴木・T・虎徹は市民を見捨てない。
正義の心が、虎徹の足を客車に向けさせ、

『馬鹿！ 下よ！』

「うおっ!？」

アニエスからの通信に少し驚きながら、見てみれば外に出る扉が破壊されていた。

運転中、万が一でも落下事故が起きないよう、自動的にロックされるが、悪党達が破壊したのだろう。

そこから外を見てみれば、

「マジかよ。 あいつら、ガッツあるなー」

感心半分、呆れ半分。

悪党達はシルバーステージの端から飛び降りると偶然、ブロンズステージの空を飛んでいた飛行船に取り付いていた。

一歩間違えれば、下手な高層ビルより高い位置にあるシルバーステージから、ブロンズステージの地面へとダイブし、破裂したトマトになっていただろう。

『感心しないで追いかけなさい!』

「お、おう!」

一旦、運転席を出るとワイルドタイガーはレールの上に戻った。

ハンドレッドパワーの力で、モノレールが落ちる事を恐れたのだが、頑丈なレールの上なら問題はない。

足場がしっかりしているのを確認すると、ワイルドタイガーは恐れる様子も無く、ジャンプ!

百メートルは優にある空間を、

『あ、やっぱり行かなくていいわ』

「おせえよ!？」

ぼふん、と音を立てて、飛行船の柔らかな船体に、ワイルドタイガーは飛び込んだ。

外側の壁の部分にしがみついているせいで、ちょっと情けない姿。どう見てもカメラ向きではないだろう。

しかし、ワイルドタイガーがどれだけの醜態を晒そうと、もう問題にはならない。

何故なら、彼が来たのだから。

それはワイルドタイガーにも、いや、虎徹にもアニエスに説明されずとも理解出来た。

「私達は君を待っていたあああああああ!！」

彼を専用に映すためにだけに用意されていたDカメラの左下から右下へと、白煙をたなびかせながら一瞬で通過する。

「君の登場を待っていたあああああ!！」

アナウンサーの絶叫が、シュテルンビルトに木霊する。

その絶叫は、シュテルンビルトの全視聴者達の熱狂と一つだ。

Bカメラが、背中に取り付けられているブースターをアップで映し、

勿論、スポンサーのロゴを映す 画面を引く。

「キング! キング! キイイイイキング!」

紫とシルバーを基調にしたロングコート型のスーツと、鉄兜のようなマスク。

「「キングオブヒーロー」スカイハイの登場だあああああああ!」

ヒーローランキング連覇を達成し、名実共にキングオブヒーロー。空を縦横無尽に飛び回る「風を操るNEXT」を生かして戦う姿は、子供から大人までを虜にする。

カメラに向かって、敬礼に似た決めポーズをすると更に加速し、フレームから飛び出す。

Aカメラが加速するスカイハイの後ろ姿を捉えた。

同じように彼の所属企業アポロンライン社は、スカイハイの名に釣られるようにぐんぐんと業績を伸ばしている。

飛行船にしがみついているというのに、一台のカメラも来ないワイルドタイガーとは、商品価値が違う。

最初からランキングポイントを気にしない折紙サイクロンを除けば、今年のランキング最下位のワイルドタイガーとは違うのだ。

「負けてたまるかよ」

ランキングポイントが死ぬほど欲しい。

そうすれば、離れて行ったファンを取り戻せるはずだ。

そして、給料があがれば娘にもっといい生活をさせられる。

その想いを籠めて、虎徹は呟いた。

「負けてたまるかよ」

若きキングオブヒーローに。

その想いを籠めて、ワイルドタイガーは呟いた。

「負けてたまるかよ！」

そんな事を考え、ヒーローの本道を見失いそうになる自分に叫んだ。

萎えそうになる心に、炎を灯す。

崖っぷちのヒーローは、誰にも注目されない中で、一人足掻き続ける。

だが、だからどうした！

すでにスカイハイは、悪党達に占拠された飛行船の運転席に到着した。

一方、タイガーは必死の思いで外壁をよじ登った所。

ここから全力疾走で向かって、スカイハイが全てを終わらせた後だろう。

十中八九、間違いない。

そうでなければ、キングオブヒーローの名は、スカイハイの頭上には輝かなかった。

だが、十の内、一か二は残っているのだ。

市民が、犯人が、そしてスカイハイが危険に晒された時、誰が助けられる？

それは、このワイルドタイガーだけだ！

「よっしゃああ！ ワイルドに吠えるぜ！」

勇ましく、走り出すタイガー！

そして、即座に引き返すタイガー！

「うおい！？」

突如、飛来したRPG。つまり、「携帯式対戦車擲弾発射器」の弾頭が、ひゅると音を立てながら、タイガーに正面から向かって来ていた。

戦車の装甲を破壊するRPGが相手では、さすがのHEROと言えど、まともに当たればシャレにならない威力を持つ。

それに百倍の身体能力があるのと、狭い飛行船の上では走って逃げる訳にはいかない。

覚悟を決めるとワイルドタイガーは振り向き、逆にRPGの弾頭へとダッシュ。

蹴った瞬間、爆発しませんように……！

と、祈りながら蹴り上げた。

何とか軌道を逸らし、空中で大爆発。

思ったより大きな爆発でワイルドタイガー内心、ちよつとびつくり。

などと言っている暇もなく、至近距離で爆風に煽られた飛行船がビルに激突し、右舷のエンジンがぐしゃりと潰れる。

「やっべ！」

賠償、これからの被害。誰の責任になるのか。

色々和不味い事はあるが、虎徹の頭からそれらが吹き飛ぶ。

ビルに激突した衝撃で、運転席から運転手二人が放り出されたのが、虎徹から見えた。

『さすがスカイハイ！ 犯人確保よりも、人命救助を最優先だ！』

最悪の結果はキングオブヒーローによって防がれた。

風を操るNEXTにより落下速度を殺して、三人はふわふわと降下して行く。

「あとは任せたよ、ワイルド君！」

「おう、任せとけ！」

スカイハイの檄に威勢よく応えると、ワイルドタイガーは走る。

「た、助けてくれえ！」

コントロールを失った飛行船はビルにぶつかりながら、進路を変
更。

シュテルンビルトを取り囲む大河に向かっている。

このままでは、どんな被害が出るかわかったものではない。

そして、悪党と言えど、HEROは命を見捨てない。

あつという間に運転席に辿り着くと、

「ワイルドタイガーが助けに来たぜ！」

ワイルドタイガーの百の必殺技、サムズアップ＆ヒーロスマイ
ルが炸裂！

「あ、いや、俺はスカイハイの方が」

「チェンジで」

「うるせえ！俺で十分なんだよ！」

正義の心知らぬ悪党二人は、無駄に足掻く。

「いやだあ！あんただとロクでもない事に、巻き込まれそうだから
いやだあ！」

「巻き込まれねえよ！？……たまにしか」

「助けて、スカイハイ!？」

「だああああ！ いいから大人しくしてろ！」

米俵でも担ぐように、暴れる二人を担ぐとワイルドタイガーは運転席から身を乗り出し、跳躍の態勢に、

「いつ!？」

目の前に客船があった。

看板の上で脅える市民達の一人一人の顔が見える程の距離。

右舷のエンジンが潰れ、進路を変えた飛行船は明らかに客船との直撃コースだ。

「やっぱり巻き込まれた!？」

「俺のせいじゃねえだろうが!？」

「ぎゃああああ!！」

「何やってるのよ」

その声は触れる者を皆、凍り付かせる絶対零度。

彼女の機嫌を損ねる事を、河の水すら恐れたのか、自らの身を押し上げ、飛行船に触れた。

キイインと耳が痛くなるほどの静寂が、シュテルンビルトを包むと、一瞬にして飛行船と客船、辺りの水面ごとが凍り付く。

『皆様、お待たせしました』

これまで叫ぶように実況していたアナウンサーは、人が変わったように大人しい声を出した。

僅かに焦らすような溜めが入り、カツ！と音を立ててライトアップ。

凍り付いた水面の上に柱が屹立。

その上で優雅に咲く花の名は、

『「ヒーロー界のスーパーアイドル」ブルーローズだああああああああああッ！』

「私の氷はちょっぴりコールド」

カメラが薔薇を模した扇情的なスーツを下からのアングルで煽って撮影していく。

露出の多い、その姿はキュートなお色気をお茶の間に届ける。

「あなたの悪事を完全ホールド！」

決め台詞とウィンク。

同時に、七色の光が彼女の周りを乱舞する。

彼女の「氷を操るNEXT」に合わせて、プリズムの光を模しているのだ。

そして、ワイルドタイガーのサムズアップ&ヒーローズマイルとは違い、お茶の間のお父さんの心をがちりホールド！

ブルーローズへの歓声が、銃声に打ち消された。

「おいおい……」

ワイルドタイガーの胸に、銃弾が撃ち込まれていた。
誰もが静まり返る中、ただ犯人の荒い吐息だけが聞こえる。

「お、俺は……」

若い悪党は初めて人を撃った感触に、手にした拳銃を震わせながら、それでも言った。

「どうせ捕まるなら、ブルーローズちゃんの方がいい！」

「あ、待て！ 俺もだ！」

「ふざけんな、お前ら！」

凍った水面の上を滑るようにして、ブルーローズに向かって走り出した。

そして、撃ち込まれた銃弾はスーツで止められ、ワイルドタイガーはピンピンしている。

薄い全身タイツに似ているが、実は特殊合金で出来ていて拳銃程度なら完全にシャットアウトするのだ。

しかも、伸縮性に優れ、下手な風船より膨らませる事も出来るスーパーな素材だ。

悪党達はワイルドタイガーなどに目もくれず、逮捕される前の最後の自由を行使しようと走る！

「うおおおお！」

悪党達は逮捕してもらおうと、ブルーローズに銃を乱射。

だが、ブルーローズとてHERO……そこは当たり前のように、

「え、やだ。　なんでこっちに来るの!？」

『出たああああ！　キューティーエスケープ！　今日もキュートだああああ！』

キューティーエスケープ。

その名の通り、可愛らしく逃げる技である。

立っていた氷柱から滑り台を滑るように、ブルーローズは逃げ出した。

「……何やってんだ。　とうっ！」

『高あああああ！　ワイルドタイガー大ジャアアアンプ！』

このままではラチがあかない。

六人のHEROから逃げられる悪党は無し。

それを証明するのは、この男ワイルドタイガーしかない！

ハンドレッドパワーを生かした大ジャンプは、十メートルを超える。

そして、ワイルドタイガー百の必殺技の一つ「ワイルドキック」
を悪党達にお見舞いしてやるんだ！

頑張れ、タイガー！　負けるな、タイガー！

5

4

3

2

1

「あっ」

『ワイルドタイガー、ここで時間切れえええ！　ハンドレッドパワーは、五分しか持たなあああああ！』

はちきれんばかりに、スーツを盛り上げていた筋肉が常人並みに戻る。

跳躍の勢いが、重力と釣り合って一瞬の無重力状態を生み出す。

そして、そのまま空中遊泳。

このままでは、重力の鎖に引かれたワイルドタイガーは、凍り付いた水面を赤く染め上げる染みになってしまっただろう。

ロックバイソンはやつと車を下ろせた所だ。

ファイヤーエンブレムと、ドラゴンキッドは、ロックバイソンに付き添っている。

折紙サイクロンは観光客の記念撮影に見切れている。

スカイハイは運転手達にサインをせがまれて動けない。

ブルーローズは、まだキューティーエスケープをしている。

今、ワイルドタイガーを助けてくれるHEROはいないのだ。

「うおおおおお！？」

迫り来る水面にタイガーが目をつぶった、その時！

黒いボディに、赤い光のラインが走る。

腕、肩、頭の横、背中、身体各所に取り付けられたクリアパーツに赤いラインが触れると、充填されるようにクリアパーツを赤く輝かせる。

一陣の旋風が通り過ぎると、ワイルドタイガーを追っていたカメのフレームから消え去った。

『なんとおおおおお！？』

あらかじめ計算していたのか、赤い旋風が着地すると、目の前には氷で転んでいた悪党。

再び赤い旋風は飛ぶ。

それも、ゆつくりと、だ。

『絶体絶命と思われていたワイルドタイガー！ 何とお姫様抱っこで救出されたああああああ！』

ゆっくりとしたジャンプは悠々とカメラを追隨させる。

スタイリッシュな跳躍、両腕にはワイルドタイガーを抱え、指先で引っかけるようにして悪党を抱える姿は、アニメスガ思わずガッツポーズするほど絵になっていた。

「しっかりしてくださいよ」

ワイルドタイガーが、そのクールでセクシーなボイスに目を開けると同時に、

「ぐえっ」

客船の看板に投げ落とされた。

”偶然”そこを撮影していたヘリのカメラが、謎のヒーローの姿をアップ。

『これはあああああ！』

サーチライトが彼を照らす。

一旦、横を向くとマスクの面を上にする。

零れ落ちる蜜のように美しい金髪が光輝く。

『これはあああああ！ ハンサムだあああああ！』

甘いハンサムフェイスはカメラ視線。

上空のカメラに向けて計算し尽くされたハンサムスマイル。

スタイリッシュなポーリングとハンサムスマイルは、お茶の間の

奥様と娘達の心をがっちりホールド！

『何というハンサムウウウウ！ここにニューHEROが誕生だ
ああああああ！』

バーナビー・ブルックスJr 彗星の如くHERO TV初
参戦。

「ちくしょー……」

一方、ワイルドタイガーは置いてあつた樽にハマっていた。
スポットライトに照らされたステージを、暗い舞台袖から眺めて
いるようで、ひどく心が疼いた。

一方、ブルーローズは、

「犯人逮捕したのに、カメラ来ないじゃない！」

「ローズちゃん、うへへ……」

犯人の頭を踏みつけながら、キレていた。

幕間『酒は人類の友だが、酒の側がどう思っているかはわからない』（前書き）

……ラノベっぽい書き方ってどうやるんだろうね？
展開から、どうしようもねえ。

幕間『酒は人類の友だが、酒の側がどう思っているかはわからない』

「なあ、ベンさん。 今日、ちょっと一杯行かない？」

鎗木・T・虎徹が、ベン・ジャクソンに声をかけたのは、バーナビーの鮮烈なデビューの次の日。

目を逸らし、いつも被っている帽子を指で回しながら、落ち着いた無き様子に、ベンは時が来た事を悟った。

これまでずっと慣れ親しんで来たTopMag社のHERO事業部で、彼がこんな態度をするのは決まって言いにくい事がある時だった。

「ああ、俺も昨日の事でたっぷり言いたい事があるからな」

「たはー、お説教は勘弁してくれよな」

わざとらしくおどける虎徹の目尻に皺を見つけ、ベンは彼と組んでやって来た年月が、驚くほど早く過ぎ去っていた事に気付いた。

「馬鹿言え。 お前にはたっぷり言わなきゃいけない事があるんだよ」

ベンは虎徹の胸に拳を当てて言った。

「なあ、虎徹」

「なんすか、ベンさん」

シルバーステージにある居酒屋。

ちよつとした仕切りがあり、畳の上で胡座をかきながら、誰にも邪魔せずに飲める。

あまり日本式には馴染みの無いシュテルンビルトだが落ち着いた雰囲気と旨い肴は、それなりにこの店を繁盛させていた。

「お待たせしました。肉じゃがと、イカの一夜干しでございます」

料理を運んで来たウェイトレスに、話を中断される。

が、ホクホクと湯気を立たせる肉じゃがは、たまらない物がある。魅惑的な香りを漂わせる肉じゃがに、ベンは生唾を飲み込んだ。

あまり食にはこだわらない虎徹と違い、ベンは食道楽だ。

三食チャーハンしか食べない男と、三食を楽しんで味わう男。

どちらの方が仕事出来るかなど考えるまでもない。

箸をじゃがいもに伸ばす。

ぐちゃりと潰れる事もなく、しっかりと掴めた。

それでいて、口の中に入れば程よい食感を残してくれる。味がよく染み込んでいた。

欲求のままに辛口の日本酒を一口含む。

「旨いなあ、虎徹」

「ベンさんは本当にうまそうに飯食いますよね」

「何言つてやがんだ。旨い飯を食つてこそ、いい仕事ができるんだよ。それだっていうのに、お前はいつもチャーハンでだな」

「はいはい、それは耳にタコが出来るくらい聞きましたよ」

肩を竦める虎徹に、ベンは少しむっとした。

「いいや、お前は何もわかってない。昨日だってモノレールのレール曲げやがって」

「い、いや、あれは」

「レール、曲げる必要あったか？ 窓ガラスだって、割らずに済んだらろ？」

都合が悪くなると、すぐに目を逸らす。
顎髭を生やす前からの虎徹の癖だ。

こいつは何も変わっちゃいねえ。

それが嬉しいと思い、それがどうにも危なっかしくて仕方がない。

「そんな事、言つてたら平和なんて守れないっすよ……」

先生に怒られている生徒。

今の虎徹は、そうとしか見えない。

小学生の子供もいるのに、全く大人に成り切れていない。

「あれ、いくらかかるか知ってるのか？」

迅速に乗客達を救出する必要があったため、という理屈で司法局に掛け合った自分を褒めてやりたい。

客観的に見て、あそこまでやる必要はなかった。

もし万が一、乗客の一人でも撃たれていたらワイルドタイガーの責任問題になっていたかもしれないのだ。

この男は、いくつになっても手がかかる。

ベンは酒を口に含んだ。

「……すみませんでした」

「今度、司法局のユーリさんに頭下げてこい。あの人が口添えしてくれなきゃ、問題になってたぞ」

「うへえ……あの人、苦手なんすよね」

「馬鹿野郎、態度には出さないけど、あの人はお前のファンだぞ。ファンを大事にしないHEROが、どこにいやがる」

「マジで！？ あの時みたいな人が、俺のファン……？」

「ああ、マジだ」

ユーリ・ペトロフ。

HERO業務に関わる企業の会議にも司法局から参加し、HEROが破壊した物品の賠償などは彼が決める。

若くして、重要なポストを与えられるだけあって、公平な判決と柔らかな物腰は、ベンに好感を与えた。

腐った役人の中で、一際輝く誠実な仕事ぶりはなかなかのものだ。しかし、そんな彼がワイルドタイガーに関係すると、僅かにほんの少しだけ鼻屑をする。

気付いている者は殆どいないだろう鼻屑が、ワイルドタイガーを一番、近くで見ているベンにはよくわかった。

一回りは違う年の彼に、ベンは勝手に同士にも似た気持ちを抱いていた。

「……サインとかした方がいいっすかね？」

「……似合わねえなあ」

ワイルドタイガーのサインを貰って喜ぶユーリを想像しようとしたが、全く想像が出来なかった。

「まあ今度、ちゃんと挨拶してきますよ……ベンさん」

「なあ、虎徹。お前がHEROやってられるのは、誰のおかげだ？」

「それは……」

ファンのおかげだ。

そんな内心の言葉が、ベンにも伝わってくる。しかし、

「スポンサー様のおかげです……」

それを飲み込めるくらいには大人になっていた。

「そうだろ。 だから、お前がすっかりしなくちゃ」

俺がお前を守れないんだよ。

いつもなら、そう言っていた。

TopMag社HERO事業部のベン・ジャクソンとして言っていた。

「お前がすっかりしなくちゃ駄目なんだよ」

「ベンさん!」

もう二度と、その言葉は言えなかった。

「……本当なんすか？ TopMagがHERO事業から撤退するって」

「誰から聞いた？」

答えは聞かずともわかっていた。

「昨日、俺を助けてくれたあいつです……。 中継が終わった後、少しHEROの心得を説教してやろうとしたら……」

「ははっ、こう言っていなかったか？ 『古いんですよ、そんな考え』」

「そう、似てる！ ……あいつと知り合いなんですか？」

「知り合い……まあ知り合いだな。お前と同じくらいには長い付き合いだ」

子供だったバーナビーが、虎徹と同じヒーローになるという事が、ベンには馴染まない。

馴染まないが、それと同じくらいに納得もしていた。

あの切ない目をしていた少年が、切ない目をしたまま青年になってしまったのだ。

「そうなんすか……。あいつに言われたんですよ。あなたがしつかりしてれば、TopMagが潰れる事もなかったって」

「あいつの言いそうな事だなあ」

クールなふりをしながら、実は一本気なバーナビーを思うと、彼がどんな表情で言ったかも想像が出来た。

それが少しおかしくて、ベンは笑った。

「笑い事じゃないですよ！　なんで教えてくれなかったんですか！　？　俺がもつとしつかりしてれば！」

傷付いた表情を浮かべる虎徹に、それが答えなんだよと胸の中で語りかけた。

少しでも綺麗なまま、虎徹を送り出してやりたかった。

「ふざけんなよ、虎徹」

だが、それを言うつもりはない。

「え」

「俺がすっかりしてればだと？ お前はどれだけ偉いんだ？」

「ベンさん……」

「お前だけが働いてるつもりなのか？ 違うだろ」

目を逸らそうとした虎徹が、必死に向き直ろうとしている。

「俺も頑張った。経理の吉野ちゃんだって頑張ってくれた。皆、頑張ってくれた」

他の巨大企業に比べて、TopMagは小さい。

そのくせ利益の大きいHERO事業に食い込んでいたTopMagは、他の大企業に弾き出されたのだ。

落ち目だったワイルドタイガーより、買取を持ちかけて来た企業から提示された利益にTopMagに飛びついた。

ベンは、虎徹を守れなかった。

「お前だって頑張ってただろ？」

「……………」

「明日の閉会式が終わったら、ここに行け」

ベンは一枚の名刺を取り出し、虎徹に渡した。

「……なんすか、これ」

「新しいお前の上司だ。しっかり挨拶して来い」

名刺には「アポロンメディア アレキサンダー・ロイズ」と書かれている。

ワイルドタイガーを、TopMagは売った。

これから色々な事が虎徹の前に待ち受けている。

HEROを辞めなくなる事もあるかもしれない。

「ベンさんはどうすんだよ！ ベンさんを置いて行けねえよ！」

だが、それでも、

「なあ、虎徹。俺はお前がHEROやってるのが好きなんだよ」

結局、ここまでやってこれたのは、それだけが動機だったのだろ
う。

それを思えば、ここで背中を押してやるくらい何ともない。

「俺の事なら大丈夫だ。なに、失業保険でのんびりしながら、次の仕事でも探すさ」

これからの生活の苦しさも、手塩にかけたワイルドタイガーを奪われる苦さも酒で飲み下して、ベン・ジャクソンは笑った。

幕間『酒は人類の友だが、酒の側がどう思っているかはわからない』（後書き）

折紙先輩の出番はこれでいいと思う。

二話『人の印象の八割は初対面で決まる』 前編（前書き）

前話でベンさんの台詞を修正しました。

名刺を渡して、

「明日、ここに行け」

「明日の閉会式が終わったら、ここに行け」

となっています。

二話『人の印象の八割は初対面で決まる』 前編

アレキサンダー・ロイズは鎬木・Ｔ・虎徹と初めて出会ったのは、一年も終わりに差し掛かり、HERO TV年間ランキング発表式の打ち上げのパーティー会場だった。

それなりに格式高く、豪華ではあるが無個性なパーティー会場にはシュテルンビルト中から、全世界から名士達が集まり、笑顔と言葉を武器に鎬^{ツバ}を削っている。

人が集まれば金と情報が動く。

まだまだそこに参加出来ているとは言い難いが、それでも大きな物の近くにいるという事はロイズの自尊心を満足させてくれた。

これをきっかけとして、自分がもっと上のステージを目指せるのだという実感もある。

ロイズは自分の顔と名前を売り込むチャンスを逃すまいと、必死だった。

しかし、その必死さを出してはいけない。

必死さとは余裕の無さ。 余裕の無さとは金の無さ。

金の臭いのしない男は仕事が出来ない。

五十に差し掛かり、仕事人として円熟を迎えたロイズは焦りを面に出すような無様は晒さず、接する者に好感と強い印象を与えて行く。

VIPに話しかけながら、ロイズは観察していた。

この場の主役であるHERO達を。

アポロンメディア社HERO事業部アレキサンダー・ロイズの飯の種を。

ひたすら料理を食べるドラゴンキッド。

まだ十代の半ばであり、色気よりも食い気を地で行っている。

下手にスポンサーに売り込ませるより、老人が多いお偉い方には

この方が正解だろう。

若さはそれだけで可愛がられ、武器になる。

しかし、少年として売り出されているが、実は少女である彼女自身は何か思う事は……満面の笑みで貪る彼女を見ているとありそうもない。

これから力をぐんぐんと伸ばす彼女の商品価値は計り知れない。しかし、近くにいるマネージャーだと思われる若い女の目には、隠しきれない甘さが見える。

商品を商品と見れない以上、自分の敵ではないとロイズは思った。

もう一人の女性であるブルーローズはと言えば、

「あの決め台詞、何とかならないんですか？ 正直、かなり恥ずかしいんですけど」

自社の社長に食ってかかっている。

確かにあの決め台詞はいただけない。

もし、自分に任せてくれれば、もっといい決め台詞を用意するものの、とロイズは思った。

会場で一際、大きな人集りを集めているスカイハイはどうか。

「ありがとう。そして、ありがとう！」

ランキング連覇のキングオブヒーローは乗りに乗っている。

そこに生まれ持っているキュートな輝きを乗せれば、商品価値は最上級だ。

ただ、グッズ関係が弱かった。

フィギュアなど今までのHERO達と変わらない路線以外にも道はあるはずだ。

自分に任せてくれれば、グッズの売り上げを三倍にしてやるものを、とロイズは悔しさを抱いた。

スカイハイの体操教室を出せば、バカ売れ間違いなしだろう。それにしても男性陣は、入社したてのサラリーマンのように着慣れていないピカピカのスーツと、ヒーローマスクを被っていて正直、不気味だ。

折紙サイクロンは……そもそもどうしようもない。

見切れ職人などというニツチなキャラが付いた彼は、その広がりようのない路線で行くしかないだろう。

ロイズとしては全く興味が沸かない。

十代の頃、コレクションしている切手を八時間自慢したら、逃げて行った彼女も同じ気持ちだったのだろうか、としばしノスタルジィに浸った。

不器用に自分を売り込むロックバイソンに、ロイズは一切の魅力を感じなかった。

しかし、そこにファイヤーエンブレムが加わればどうか。

ロックバイソンをからかうふりをしながら、スポンサーに売り込んで行くファイヤーエンブレム　ヘリオスエナジー社、社長ネイサン・シーモア　の手腕は恐ろしい物がある。

最終的に敵となるとすればネイサン以外にはいないと、ロイズは確信した。

そんな中、ワイルドタイガーは鍋木・T・虎徹は、

「よう、何かうまいもんあったか？」

「んー、このハギスは美味しかったよ」

「ハギスってお前、こんなもん……うまいな、これ」

「でしょー？」

ドラゴンキッドと暢気に飯を食い、

「最近、ブログが炎上したでござる……」

「俺なんて三日で更新するの忘れたぜ」

折紙サイクロンの相談に乗ったりしていた。

ワイルドタイガーは崖っぷちだ。

実質、ランキング最下位の彼は必死になって頭を下げ、スポンサーを探さなければならないはずの立場だ。

間違つても、のんびり飯を食べながら、他人の相談を受けている暇はないはず。

しかも、何故か一人だけ私服だ。

小物にもイヤミにならない程度に金をかけ、なかなかのセンスを感じられるが、だからと言ってパーティーに出る服装では無い。

そのくせ、彼の周りには人が集まって来る。

彼の服装を咎める者もおらず、明らかにお偉いさんに見える相手とも、平然と話すワイルドタイガーは、この場の主役の一人だった。相手から人が集まる立場ではないはずのワイルドタイガーは、立場以外の何かで人を集めていた。

それはロイズに絶対的に無い物だ。

HEROだけではなく、大企業の社長達までがワイルドタイガーを詣でて行く。

スポンサーになってくれ、と頭を下げる訳でもなく、ただ話してそれで終わり。

あれだけのチャンスをふいにしていくワイルドタイガーに、ロイ

ズは苛立った。

ちよろちよろしていたワイルドタイガーが、ファイヤーエンブレムの元に行った時、チャンスだと気付いた。

ロイズからワイルドタイガーに挨拶するのは、鼎の軽重が問われる。

「あらん？ アレクちゃんじゃないの」

「おお、ファイヤーエンブレムさん。 いらしてたのですか」

ファイヤーエンブレムは、ロイズの思惑を読み取ってくれた。

こうやって自然に挨拶をする分には問題あるまい。

お互いに気付いていなかったふりをするくらいは、当たり前の話。白々しいと思っでは、仕事にならない。

このままスムーズにワイルドタイガーを紹介してもらえば、

「ん、誰この人？」

しかし、マナーや駆け引きもワイルドタイガーは完全にぶち壊す。

「こちらアポロンメディアのアレキサンダー・ロイズさんよ。 来期からHERO事業を統括なさるの」

「どうも」

内心の苛立ちを完璧に隠して、ロイズは挨拶をした。

TopMagからロイズの名は伝わっているはずであり、これまで頭の一つも下げなかったワイルドタイガーもこれで、

「あ、ども」

普通に挨拶を返された。

「……………」

「……………」

社内秘にはなっているが、ヘリオスエナジー社長のネイサンには、来期からワイルドタイガーがアポロンメディアに移籍する予定は伝わっているだろう。

しかし、本人だけがよくわかっていない。

思わず、ネイサンと無言で見つめ合ってしまったのは、仕方ない事だろう。

ネイサンの黒い肌に汗が流れ落ちた。

「……………ちよつとこつち来なさい」

「どうしたんだ？」

「いいから早く来いって言ってんだろぅが！……………ちよつと待って頂けますかしら？」

女性のような口調と、荒々しい男性の口調と、気分次第で切り替わるファイヤーエンブレムに面食らう相手は多い。

「は、はい」

びっくりしてしまったロイズが特別、臆病という事はないはずだ、多分。

ワイルドタイガーの首根っこを掴むと、ファイヤーエンブレムは、

「……の人が……の新……上司……！」

「え、あのおっさんが!？」

おっさんにおっさんと言われる筋合いはない。
ロイズは心の底から思った。

「あー……どうも。これからお世話になります……です」

ファイヤーエンブレムから解放されたワイルドタイガーだが、頭をかきながら挨拶をしてきた。

「資料は拝見してるよ。とらてつだからタイガーね」

「あ、いや、こてつです。 鎚木虎徹……です」

もし、この場にネイサンがいなければ、もっとイヤミったらしく
言っただろうが、この程度が限界だろう。
名前も読み方くらいは、さすがに覚えている。

「アレクちゃんはこう見えて、とっても偉いんだからねえ。 失礼
しちや駄目よ?」

「わかってるって! ガキじゃないんだから」

「はっはっは……なかなか個性的だね、とらてつくんは」

「こてつです……です」

ですを付ければ敬語だと思っている男が、ガキでないなら何なのだろうか。

「そつえば君の今後の予定は聞いてるかな？」

「あ、いえ何も……です」

「明日から来てもらっても構わないかな？」

ここにファイヤーエンブレムがいなければ、こんな丁寧には言わない。

明日は覚えている、という思いを縛り付けながら、ロイズは言った。

「あ、明日は娘のフィギュアスケートの発表会があつて……です」

「嫌なら辞めてもらつてもいいんだよ？」

あ、と思つた瞬間には全て口から零れ落ちていた。

明日、一日くらいなら本来は問題ない。

それにまだ一枚の書類も交わしていない以上、法的にはアポロンメディアは、ワイルドタイガーを拘束出来る道理はない。

しかも、この場にはネイサンまでいる。

こんな下らない事で、ワイルドタイガーを気に入っているネイサンの機嫌を損ねて、アポロンメディア対ヘリオスエナジーの引き金を引いた男にはなりたくない。

「……わかりました……です」

しかし、ワイルドタイガーは、虎徹は応えた。

「あ、ああ。 よ、よろしく頼むよ」

何かをぐつと抑え付けた目をした虎徹に一瞬、ロイズは言い淀んだ。

暗い目だった。 だが、そこには確かに力があつた。

それはロイズは知らない目だった。

何かを言わなければならない。

そう考えても言葉にならない。

お偉方におべっかを使うのには、よく回る舌は今、何の役にも立たない。

「おお、ロイズ君、ここにいたのかね」

「し、社長……！ 紹介いたします。 彼が来期から我が社のニュー
ーHEROのワイルドタイガー君です」

会話に割り込んで来た社長の姿に一瞬、安堵してしまった自分を、ロイズは許せそうに無かった。

二話『人の印象の八割は初対面で決まる』 前編（後書き）

これから先、タイバニの二次が増えたとしても、ロイズさんにここまでスポットを当てる話は他に出てくるだろうか。

二話『人の印象の八割は初対面で決まる』 後編 1

ロックバイソンこと、アントニオ・ロペスを一言で評するなら『善人』だ。

今も必死にスポンサー探しをしなければならないのに、親友の虎徹が心配でならない。

少し離れた所でそわそわしている自分が馬鹿馬鹿しいと思いながら、離れる事が出来ない。

「君がワイルドタイガー君かね。 いやあ、いい面構えじゃないか」

「はあ……どもです」

どもです、じゃねえだろ。

アントニオはツツコミたくなる自分自身を抑えた。

何せ相手はメディア王にして、HERO TVを放送しているアポロンメディアの社長アルバート・マーベリックだ。

来期からアポロンメディア所属になる虎徹の上司になる相手に、その態度は何なのだと正座させて説教してやりたい。

もし少しでも機嫌を損ねた日には、クビは間違いない。

もしも、マーベリックが本気を出せば虎徹を犯罪者として、報道する事も出来るだろう。

「……少しは落ち着きなさいよ」

「お、俺は冷静だ！」

ネイサンの言葉に落ち着いて返事を出来る程度にアントニオは冷静だ。

何故か吐かれた溜め息を不思議に思いながら、虎徹とマーベリックの会話に耳をすました。

「はっはっは、やはり君のようなベテランHEROは頼りになるね。君を選んだ私の目に狂いは無かったよ」

「不肖、この鎬木・T・虎徹に万事、お任せください！」

ほんの少しの間に何があったのか、二人はやたら打ち解けていた。

「いや、待て。ひょっとしたら、まだ逆転ホームランがあるかもしれない」

なにせ虎徹だ。

たまに鋭い所を見せたと思えば、どうしてそこまで？と無骨者のアントニオですら思うほど鈍い時がある。

「ほんと、気は小さいわよね……。娘が出来たら、箱入りにして鎖で縛って飾っておくタイプでしょ」

自分の娘というフレーズに、アントニオは思いを寄せるHERO TVのプロデューサーのアニエスの顔を脳裏に浮かべた。

アニエスさんの娘……。

一目見た時からアントニオはアニエスに恋をした。
可憐で清楚なアニエスの立ち姿。
座れば大輪の薔薇のようであり、彼女の唇から零れ落ちる言葉は百合のように甘やかだ。

彼女が望むなら、アントニオは身体を張るだろう。

戦えと言つなら、マーベリックとでも、

「僕はこんな人とは組めません！」

「バーナビー、いきなりどうしたんだね？」

「俺だって、お前なんかと組めねえよ！」

妄想に浸っていたアントニオを現実に戻された。
いつの間にかマーベリックの横に男が立っていた。
名前を確か、

「バーナビー・ブルックス」。

ハンサムよね、彼

「おお、そうだった」

シーズンの最後に颯爽と登場し、シュテルンビルトの話題を独占した伊達男。

すらりとした長身にチャラついたホストのような真っ赤なスーツ纏っている。

恐らくあのベビーフェイスで、女を食い物にして来たのだろう。
そのハンサムフェイスに似合わぬ目つきの悪さが動かぬ証拠だ。

何としても俺がアニエスさんを守らなければ。

アントニオは固く心に誓った。

その誓いはきっと、アントニオのNEXTよりも堅い。

「その頑固さが可愛い所なんだけどねえ……」

「ん？ バーナビーは頑固なのか？」

ネイサンの人を見る目は確かだ。

アントニオのように信じすぎる事もなく、的確に人を見抜く。

何度もアントニオの窮地を救ってくれたこの得難い友人は、ただ
アニエスの魅力のみ理解出来ない。

恐らくアニエスの美しさに嫉妬して、目が曇っているのだろう。
牛角がそんな事を考えていると、

『ボンジュール、ヒーロー』

アントニオの天使から通信が入った。

シュテルンビルトには沢山の人々がいる。

その中で彼らを二種類に分けるとして、最もわかりやすい言葉は
何か？

『成功者』と『失敗者』だ。

今、二人の男達がその分水嶺に立っていた。

「我々はシュテルンビルト防衛軍である！ この腐り切ったブル
ジョア達から富を分配し、我々は労働者の正当な権利を勝ち取るの

だ！」

三方を河川に囲まれたシュテルンビルトの冬は寒い。
それは夜になると、どれだけの厚着をしていても変わらない。

「なあ、佐藤……そろそろ帰ろうぜ」

「馬鹿！ 同志と呼べと言っただろう、田中！」

二十代の始め頃だろうか。

街頭に立つ二人は、とにかくありったけの防寒具を着込んで来ま
したという有り様。

よほど寒いのか、顔を隠すような厚手のマスクをして、なお震え
ている。

「お前も田中って言ってんじゃねえか……つか、もう帰ろうぜ」

「何を言っただ、同志田中よ！ 我々、労働者は団結せねばならん
のだ！」

「いや、団結どころか……歩いて行く人、ガンスルーじゃん」

「む、むっ……」

拡声器も持たず、たった二人だけの街頭演説などともに聞く者
など、よほどの暇人でもなければお断りだろう。

「だ、だが、貴様にも革命闘士としてのプライドが！」

「ねえよ。つか、女の子にモテるって、お前に誘われて着いて来

「俺が馬鹿だった！」

「何を言っている！」

佐藤は憤りを露わにマスクを外しながら言った。

「我輩がモテるのは事実だ！　これはつまり革命闘士がモテるという事。同志田中よ、貴様も革命に青春を燃やせ！　さすれば貴様もモッテモテのウツハウ八間違いないのである！」

マスクの下から現れたのは、整った顔立ち。

ぱっちりとした二重瞼が、彼に何とも言えない色気を与えている。若獅子のように豊かで豪華な金髪。

怒りに赤く染まった白い肌は、暇と金を持て余したマダムを相手にすれば、車の十台くらいは簡単に与えてくれるだろう細やかさ。つまり、

「ちげーし。　てめえがイケメンなだけだろ！　革命関係ねーし！」

「いいや、革命だね！　我輩革命だね！」

「意味わかんねえ！？」

ぱち、ぱち、ぱち。

言い争う二人の間に手を打つ音が割り込んだ。

「さすがは革命の闘士様ですわね。　先ほどの演説はお見事でしたわ」

奇妙な女であった。

「うむ。ほれ見ろ、田中。わかる者には、我輩の革命精神がわかるのだ！」

厚着をしていても田中が寒さに震えているほどの寒風の中、その女は大胆にカットされた白のノースリーブと所々、肌が露出したパントツのみ。

まばたきするたびに瞼に見える、スペードのマークを描いた奇妙な化粧。

奇妙な女であつた。

そして、

「美人だ……」

「あら、こちらの方も頼りになりそうですね。実は……革命闘士様達にお願いがありますの」

聞いて下さいますか？と小首を傾げる彼女に、

「うむ、か弱き婦女子を守るのも革命闘士の「この田中一郎に万事、お任せください！」……お前」

「さすが革命闘士様ですわね！ 実は……えっと、こんな場所では、ゆっくりとお話出来ませんわ。わたくしに着いて来て頂けませんでしょうか？」

「はっはっは、革命闘士である僕が、あなたのような麗しき女性の頼みを断るはずがないではありませんか！」

「まあ！ さすがですわね！」

「ところで嬢さん、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

女はチャームिंगな（佐藤には胡散臭く見える）笑顔を浮かべると、

「クリームとお呼びください」

クリームと名乗る女に一発で骨抜きにされた田中の背を見ながら、

「やれやれ、きな臭い事になりそうだ」

革命闘士は肩を竦めた。

しかし、その口元は、闘争の臭いを嗅ぎ付け、本人も気付かぬうちに歪んでいるのだった。

二話『人の印象の八割は初対面で決まる』 後編1（後書き）

こつこつ訳わからんキャラ出すのは大好きです。

二話『人の印象の八割は初対面で決まる』 後編2（前書き）

自分の字数計算の出来なさに、背中がマツハでヤバイ。
あいたたた……。

二話『人の印象の八割は初対面で決まる』 後編 2

「あれ、俺やつちやつた？」

「完全にやらかしたな」

田中と佐藤はシュテルンビルト銀行シルバーコースト支店の中にいた。

時間は夜の九時。

まだまだ歩いている人は多いはずだが、シャッターが下ろされ、外の様子は伺えない。

「この銀行は俺達が占拠した！」

「ヒヤッハー！」

他にも五人の覆面を被った男達が、天井に向かって銃を乱射している。

その暴虐に、まだ残業をしていた数名の職員と警備員が怯えたように身を竦めた。

クリームと名乗る女の色気にふらふらと着いていく田中と、止める気がなかった佐藤はあれよあれよという間に車に乗せられて辿り着いた結果がこれだった。

全員に自動小銃一丁が渡され、隊長格の男二人がRPG一本ずつ背負っている。

何が楽しいのか、まだ壁や天井に銃弾を撃ち込む男達を見て、佐藤は少し離れた所で吐き捨てた。

「何をやっているんだ、あいつらは。まだ金が手に入った訳ではないというのに」

「っていうか銀行強盗じゃん！」

「全くプロではないな！」

「じゃあ、お前はプロなのかよ!？」

「いや、まだやった事はないぞ」

「まだ!？」

「それより、壁際に寄れ」

「何でだ？」

「ああ、そこにいと突入に巻き込まれる」

佐藤は腕に巻いていた通信機を、TVモードに切り替えた。
チャンネルを合わせると、流れて来るのは田中にも馴染みの深い曲。

「おい、これって……」

「ああ、あれだ」

シュテルンビルトに住む全ての人が知っている。
悪党は恐れおののき、全力な市民には安堵を齎す。

『さあ、今宵も始まりました。 エンターテイメントレスキュー番組 HERO TV！ 今日の犯人達は 』

「田中、お前は逮捕歴あるか？」

「ねえよ。 って」

数人の犯人達の名前と覆面を被った顔写真が公開され、最後に覆面姿の田中と佐藤が映し出される。

田中一郎と佐藤奏という名前まで全国放送に乗った。

「俺も出てんじゃん!？」

「どういう事だ……？ 革命闘士たる我輩ならともかく、前科の無ただの大学生の田中まで名前が出るとは」

「知らねえよ!？ そ、それよりすぐに逃げようぜ！ …… クリームさんもいないし」

こんな時まで女を優先する友人に内心、戦慄しながらも佐藤は落ち着いた声で言った。

「まあ待て。 今、逃げたらあいつらに背中から撃たれる。 こころは我輩に任せろ」

「お、おお……」

見た事がないほどに生き生きとした友人の姿に、佐藤は一縷の望みを託した。

「あのスーツは俺の魂です。あれ以外、着るつもりはありません」

「嫌なら辞めてもらってもいいんだよ？」

HERO達を迅速に運ぶトランスポーターの中で、虎徹とロイズは言い争っていた。

いや、言い争いというのは正しくない。

「……っ。わかりました……」

虎徹は奥歯を噛み締め、帽子で目元を隠した。
言い争いになるまでもなく、虎徹は折れた。

そんな彼を見て、ロイズは溜飲を下げたつもりになった。
所詮は飼い慣らされた虎だ。飼い主には逆らえない。
そう思い込もうとした。

実際はまだ奇妙な敗北感が、ロイズの中でくすぶっている。

「」

「早くしてくださいよ、おじさん」

ロイズが口を開こうとした瞬間、バーナビーが虎徹に話しかけて来た。

自分でも何を言うつもりだったのか、ロイズにも永遠の謎になりそうだった。

「うるせえ、ちょっとくらい待ってろよ！」

「貴方が僕の三分を無駄にした事を、僕は一生、覚えています」

フォローする気がないロイズでも面食らうような事を、澄ました顔でさりとて言い放つバーナビーに、虎徹はげんなりとした顔を向ける。

「お前、友達いないだろ……」

「いますよ」

「嘘だ!？」

「ええ、一人だけですが、信頼出来る友人が」

「……そいつもお前みたいに性格悪いのか」

「失礼ですね。無駄飯食らいの貴方よりはマシです」

「お前なあ！」

「はいはいはい、そこまで！二人とも早くヒーロースーツを着てきて頂戴」

虎徹とバーナビー。

どついう訳かわからないが、やたら仲の悪い二人の上司になった事を、ロイズは後悔し始めていた。

頭を抱えなくなる気分をロイズは無理矢理、ねじ伏せる。

「斉藤くん、あとは任せたよ！」

「……………」

「うおっ、びつくりしたー！」

どこからともなく、ぬつと虎徹の背後より顔を出した白衣を着た色黒の小男。

頭のでっぺんはつるりと輝き、眼鏡の下の目は虎徹をじろじろと露骨に観察している。

「あ、ども。　ワイルドタイガーっす」

「……………」

「…………ワイルドタイガーです」

「……………」

「ワイルドローターイーガーです！」

「ああ、斉藤くんと話す時は顔を近付けて。　凄く声小さいから」

メカニックとしての腕はシュテルンビルトで五指に入るほどだが、

コミュニケーション能力の欠如っぷりも半端な物ではない。

そこを上手く利用し、前の会社から斉藤をロイズが引き抜いて来たのだ。

その時は我ながらいい仕事をしたと思っていた。

しかし、

「はあ！？ 前のスーツがクソスーツって何ですか！？ めちゃくちゃ格好いいじゃないですか!？」

「フッ……」

食ってかかる虎徹を鼻で笑う斉藤と、

「やれやれ……」

スタイリッシュに眼鏡の位置を直すバーナビーを見て、

「……不安だ」

胃薬の手配をしておこうとロイズは思った。

この連中を纏めるのは骨が折れそうだ。

『いい？　今日はバーナビーのお披露目だから、スカイハイとあんな達二人だけよ。　あとタイガー、貴方はバーナビーのフォロ―。　いいわね？』

『腕に着いてるのは、ワイルドシュートだ！　前にお前が使ってたクソスーツの数十倍のワイヤー強度があるぞ！』

『返事をしなさい、タイガー！』

『わかったか？　わかったな！』

「だああああ！　うるせえー！　大体、斉藤さん普通に喋れるんじゃないですか！？」

新しいスーツを着込んだ虎徹にアニエスと斉藤から同時に通信が入って来る。

通信機越しになると声の大きくなる斉藤、元々声のでかいアニエスの声がワイルドタイガーのヘルメットの中にぐわんぐわんと響く。すでに銀行前にスタンバイしているというのに、どたばたしているワイルドタイガーを見てロイズはため息を吐いた。

「すまないね、バーナビー君」

「いえ、最初からあの人を当てにしていませんから」

さらりと返すバーナビーに緊張の色は見えない。

マーベリックの秘蔵っ子という触れ込みで連れて来られたバーナビーは訓練では、それに相応しい結果を出し続けている。

しかし、それならもう少しコミュニケーションについて教えておいて欲しかった、とロイズは思う。

『ああもう！ もう三十秒前になっちゃったじゃない！ スカイハイがシャッターを吹き飛ばしたら、ゴーよ！』

「へいへい……」

「任せてください」

ここで何か言つべだろうか、とロイズはしばし迷い、

「二人とも我が社のために頑張つて来てくれ！」

「この人が僕の足を引っ張らないように祈っていてください」

「てめ、このやろつ……！」

火に油を注いだ。

そして、そんなぐだぐだとやっている二人を相手にする事なく、彼が動き出す。

『今期、初めての出勤ながら、その風は全ての悪を逃さな―い！ シュテルンビルト市民を守るキングオブヒーロー！ その名はああああああ！』

「とうつ！」

ビルの上から飛び降りる人影。

人生に疲れたサラリーマンか？

いや、その姿に一切の情気は感じられない。

銀の兜にコートをたなびかせて、彼がシュテルンビルトの空を支

配する。

彼より高き者は無し。
その名を、

「スカイハニー！」

両の手の間に集まる風は、まさに悪を吹き飛ばす威風。

『おーっと！ キングオブヒーローは今年も絶好調！鋼鉄製のシャッターを一発ノックアウトだー！』

凶悪犯罪から守るために、シュテルンビルトの銀行は軒並みシャッターが分厚く出来ている。

しかし、スカイハイの風を操るNEXTの前では薄紙に過ぎない。
凄まじい音を立てながら、大穴を開けて吹き飛ばされる。

「行くぜ、バニー！」

「僕に命令しないでください。　ってちょっと待ってください、バニーって僕の事ですか！？」

「おう、お耳が長いバニーちゃんってね！」

『はいーい！ ハンドレッドパワーを発動したHEROコンビが、疾風の如く銀行内に突入うううううううううう！』

「僕はバニーじゃない！ バーナビーです！」

赤と白の装甲。　バーナビーのスタイリッシュさを全面に出したスーツのデザイン。

両の目が赤く輝き、悪党達はたちまちバーナビーの眼光にひれ伏す事だろう。

「僕はバーニーじゃない！ バーナビーです！」

緑と白の装甲。 ワイルドタイガーの精悍さを全面に出したデザインは悪党達に畏怖を……頭の横に手を当て、兎の真似をしていなければ与えるだろう。

「そんな言い方はしていない！」

「そんな言い方はしていない！」

ワイルドタイガーはわざとおちやらかした声を出し、バーナビーを煽る。

『どうした、タイガー&バーナビー！？ 仲間割れかああああ！？』

外でモニターを見ていたロイズは退職金がいくら出るか計算を始めた。

貯金と合わせれば恐らく故郷に帰って、小さな喫茶店くらいは出せるだろう。

『あんた達、真面目にやりなさい！』

「ちっ、怒られちゃったぜ」

「貴方のせいですからね」

アニエスの怒声を聞き流しながら、二人は会話を続ける。

「よし、じゃあこうしようぜ。犯人を多く逮捕した方が相手の命令を一つ聞く」

「僕が勝ったら、ちゃんとバーナビーと呼んでもらいますからね」

「いいぜ、なら」

「スタートです！」

「あ、汚ねえ！」

赤い流星と、少し遅れて緑の流星が夜の銀行に輝く。

「うおお……マジやべえ。HEROマジやべえ」

「……近くで見ると、こんなにも凄いものなのか」

壁や天井すら足場とし、縦横無尽に跳ね回るワイルドタイガーとバーナビーは強盗犯達を描写の必要も無いほど、一瞬の間に片付ける。

残るのは田中と佐藤だけという有様だ
しかし、革命しなければならぬのだ。
絶対的な強者に人は立ち向かわなければならない。
佐藤の魂は音を立てて、燃え上がる。

「よっしゃあ、三人逮捕！」

「くっ……！」

出遅れたワイルドタイガーだったが、固まっていた三人を上手く逮捕していた。

焦るバーナビーと、カウンターに隠れていた二人の目が合った。

「この二人を逮捕すれば……！」

「ありがとうございますううううう！」

「なっ」

「実はこの男達に脅されて、無理矢理に従わされてたんです……」

覆面を脱いで、その美貌を涙で濡らす佐藤は、見ようによっては少女に見えるほど可憐だ。

そんな彼が涙を流せば、どうか？

普通の者なら、それだけで騙されてしまっただろう。

「知りません。僕のポイントになってください」

しかし、バーナビーには通じない。

怒りと虎徹に負けている屈辱の前に、理屈と理性を吹き飛ばして

いるのだ。

「ちよつ、ちよつと待つてください！ 自首しますから！」

計算が崩れた。

田中はそう思いながらも、弱々しい擬態をやめるわけにもいかない。

「駄目です」

バーナビーの冷静な、冷静なふりをした声。 振り上げられる拳。

「あわわわわ……」

せめて、情けない声を上げる田中だけでも庇わなければ、と佐藤は考えた。

革命闘士が弾圧されるのは当然だが、その覚悟も無い田中を傷付けるのは本意ではない。

田中を抱き寄せるように佐藤は動いた。

「待てよ」

だが、バーナビーの拳は彼らに振り下ろされる事は無かった。

「……邪魔しないでください」

ワイルドタイガーがバーナビーの腕を掴む。

その力はまるで万力で締め上げられているようで、スーッと越したというのにバーナビーに痛みを与えた。

「抵抗しない相手を殴ったら、お前はHEROじゃなくなる」

「どうせ、貴方が負けそうだから言ってるんでしょ？」

「なら俺の負けでいい。だけど、HEROはそれだけはしじゃない」

ハンドレッドパワーだ。

同じ百倍の身体能力だというのに、バーナビーの腕はぴくりとも動かせない。

「……離してください！」

「バーニー！」

「殴りませんよ。このまま警察に引き渡します。……それでいいでしょう？」

不貞腐れたような、しかし力を失った声を聞いてワイルドタイガーは掴んでいた腕を放した。

「ああ、それで……ってあれ？」

視線を助けたはずの二人に向けると、

「……どこに行ったんでしょ？」

綺麗さっぱり消えていた。

恐らく外を囲む警察に、捕まっているだろうと考え、二人は彼らの事を忘れた。

「……とにかく俺の負けか。悪かったな、からかったりして」

頭を掻き、明後日の方向を向いて謝るワイルドタイガー。

これでも本人は一応、年長者として譲ってやらなければ……と考
えているが、誰がどう見ても子供が謝っているようなひどい態度だ。

「……引き分けです」

「は？」

「引き分けです！」

「はっ」

「何がおかしいんですか！ 帰りますよ、おじさん」

「待てよ、バニー。人質を助ける所までHEROの仕事だぜ！」

「……っ！ わかっています！」

「ふはははは、さすが我輩！ 仲間割れの瞬間を見逃さず、逃げ出すとは凡百の者には出来まい！」

「……なあ、コンビニ寄っていいか？ 下着買いたいんだけど」

シュテルンビルトの闇の中に二人の革命闘士が消えた。

彼らが大輪の悪の華を咲かせるのか、燃え盛る革命の炎となるか。それはまだ、誰にもわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5406v/>

TIGER & BARNABY

2011年9月1日06時20分発行